

【レポート】9月25日（木）

「語りはじめたご本人に学ぶ～現場に学ぶ真の医療福祉倫理をもとめて～」

第1回 当事者から学ぶということ

国際医療福祉大学
熱海キャンパス
修士課程1年（13s1031）
梶 寿代（保健師）

大熊由紀子先生、ゲストの皆様、先日は御講義ありがとうございました。
今回、本講義を受講した理由は、「当事者から学ぶ」という言葉に惹かれ、仕事を終えてからどのようなお話が聞けるのかときどきしながら授業に臨みました。

私は、小さな町の行政保健師として20年余り働いてきました。
赤ちゃんからお年寄りまで地域で多くの方々と接し、いろいろな事を教えていただきました。まさに当事者から学ばせていただきました。

しかし、本日お話をさせていただいたゲストの皆様のように、様々なサービスを組み合わせながら重度の障害を抱えて働きながら一人で生活をしている方やアルビノという障害と向き合いながら生活している方やご家族の皆様との関わりがなかったため、恥ずかしながら知らないことも多く本当に多くの学びを頂きました。

介護保険分野で勤務していた時、介護保険の枠だけでは生活が成り立たない住民の方がいました。相談に来られる方の背景には、様々な個別の問題があり、制度だけでは片づけられないことがたくさん潜んでいました。

私たち保健師は、そのような方々の生活を支えるために、制度では埋まらない支援を探し、地域のマンパワーや民間のサービスなどの社会資源を困っているご本人や家族と一緒に相談しながらつなげていきます。時には自分自身もサービス提供者に回るということもありました。

今回のお話を聞いて、どこの誰に相談したらよいかわからない住民の方は多く、結局、制度の壁に阻まれて自分自身で何とかするしかない人もたくさんいるのだろうということを改めて考えることができました。

アルビノという障害を抱えた皆さんとアルビノのお子さんを育てるお母さんであるゲストの皆様にもとても感謝しています。
あまりにもアルビノについて自分が知らなかったことを恥ずかしく思い、そしてこの日をきっかけに勉強してみようという思いに駆られました。

とても印象的だったのは、皆さんがふつうに生活されていること…仕事をして、恋をして結婚をして、子育てを楽しんで…。しかし、当事者団体に多くの方々が集われているのを知り、地域で生活していく中で教科書には載っていない、皆さんが抱えている多くの悩みや不安がきつとたくさんあるであろうと思いを巡らせていました。

医療が十分に手を差し伸べてくれなかったお話、逆に必要な時に手を差し伸べてくれる身近な医師の存在についての両方のお話をしてくださった時、医療職の在り方についていろいろ考えていました。

私は、医療職といえどもすべての事を分かっているわけでないといつも思っています。むしろ知らないことが多いかもしれません。自分の経験からもそう思うことが非常に多いです。保健師は、地域で様々な相談を住民の方から受けます。健康や病気のことだけでなくゴミの問題や犬や猫の事までびっくりするくらい様々です。困っていることに関しては、その都度、相談者やその家族と一緒に考え、勉強しながら、必要な人につなげたり、それでもまた困ったら考えたりと繰り返し繰り返し、一步一步前に進んでいきます。こうしてコツコツと壁を乗り越えていくと、ご本人からの相談をだんだん少なくなります。相談がなくなる事はさみしい事ではなく、自分自身で解決する力が付いたというサインでもあることから、むしろその時は大変うれしく思います。

そして医療職としては、そのような一歩が次の方の支援への知識に繋がり、まさに当事者が教えてくださる学びにつながっていると信じています。是非、思い切って地域の保健師を巻き込んで相談を投げかけてほしいとも感じました。

いろいろな事を思い出しあつという間に時間が過ぎました。

今後の講義も楽しみです。

毎回、感想のようなレポートになってしまうと思いますが、自分の感じたことをまとめていきたいです。よろしくお願いします。